



院内学術集談会

第40回 済生会滋賀県病院学術集談会

(令和3年度)

日 時：令和4年2月18日(金)

場 所：済生会滋賀県病院 Web

プログラム

医学誌奨励論文賞 表彰

学術・図書委員会 委員長 勝盛 哲也

演 題

1. 乳房撮影装置の日常管理における実施方法の検討
画像診断科 弥永 彩有
2. 当院ICUでの早期離床の試み
～早期離床・リハビリテーション加算算定に向けての取り組み～
リハビリテーション技術科 重井比良人
3. 新しい吸着型血液浄化器レオカーナを使用して
臨床工学科 澤井 舜仁
4. 退院時薬剤管理指導料の算定に対する取り組み
薬剤部 小林 辰馬
5. エコーで診断したバルサルバ洞破裂の一例
臨床検査科 栗本 明典
6. 看護補助者夜勤導入による看護業務の負担軽減への取り組み
看護部 旭 理恵
7. 里親への育児教育入院を実施した一事例
看護部 久保 明美
8. COVID-19病床における看護実践とチーム編成の振り返り～立ち上げから第5波まで～
看護部 早川 大裕

9. COVID-19後に生じた反回神経麻痺の1例
耳鼻咽喉科 宗川 亮人
10. 特発性腎出血と診断した小児例
臨床研修医 垣内 泰生
11. 特発性脊髄硬膜外血腫に対する当院での治療成績の検討
整形外科 西 亮祐
12. ウィルス性髄膜炎と診断し入院後に抗NMDA受容体脳炎と判明した1例
臨床研修医 加藤 悠太
13. 孤立性上腸間膜動脈解離と腹腔動脈解離
臨床研修医 横谷 優作
14. 感染性顔面動脈仮性動脈瘤破裂により気道緊急をきたした一例
臨床研修医 古田 謙
15. 慢性期に繰り返し症状を呈した茎状突起過長症による内頸動脈解離の一例
臨床研修医 山崎 貴士
16. 特徴的な頸椎MRI画像所見を呈したovershunting-associated myopathyの1例
臨床研修医 河野 仁
17. 急性腹症・ショックバイタルで救急搬送され子宮内外同時妊娠で卵管峡部妊娠破裂をみとめた一例
臨床研修医 山岨 真希
18. 独歩で退院となった心肺停止の一例
臨床研修医 佐藤 健太

19. アルコール性肝硬変に特発性細菌性腹膜炎を合併した一例
臨床研修医 岩本 在央

20. ニューモシスチス肺炎と臨床診断し播種性クリプトコックス症も合併した後天性免疫不全症候群の1例
臨床研修医 大江 崇史

抄録

1. 乳房撮影装置の日常管理における実施方法の検討

画像診断科 弥永 彩有, 鰐部亜砂子
庄司 桃子, 藤田香菜恵
枚田 敏幸

【背景】

検診、診療へ提供する画像の質の向上・安定の為に乳房撮影装置の品質管理が重要となる。品質管理マニュアルには、乳房撮影装置の日常点検にてファントムの画素値の管理を行うよう記されている。

【目的】

乳房撮影装置の品質管理実施方法の検討。

【方法】

乳房撮影装置はSIEMENS社 MAMMOMAT Inspiration. 2種類のファントム、円形アクリルを使用し撮影を行った。ファントムに4つの測定点（ROI-A～D）を設定し、測定者別による画素値の検討をファントム設置用の補助具使用前後の値にて行った。

【結果】

測定点の変動量はどの測定点でも垂直方向のずれが大きく、補助具使用後は全ての測定点で改善された。測定者2名での画素値のt検定はROI-A～Cで $P<0.05$ 、ROI-Dで $P>0.05$ となり、補助具使用後はROI-Aで $P<0.05$ 、ROI-B～Dで $P>0.05$ となった。ROI-Aにおける画素値の管理幅の比較では、補助具使用後の管理幅の方が小さくなった。

【考察】

画素値の再現性を良くするためにROIの位置を一様にする必要があり、個人差の無い測定方法での実施が望ましい。補助具の使用で個人差が改善し、管理精度は向上されたと考える。

【まとめ】

乳房撮影装置の管理にはファントム設置用補助具を使用し、複数人の測定値にて画素値の管理を行う。

2. 当院ICUでの早期離床の試み

～早期離床・リハビリテーション 加算算定に向けての取り組み～

リハビリテーション技術科 重井比良人、武内 剛士
岡本 陽介、小澤 和義

ICU治療の主目的は救命であり、救命された患者の身体機能予後について、ICUの現場では優先順位が低く、退室後に一般病棟にて対応されていた。しかし重症患者の救命率が向上すると、ICU期間における身体機能管理が、ICU退室後や退院後の身体機能に及ぼす影響に注目が集まり、ICU在室中の早期リハビリテーションの有用性が論じられるようになってきた。これは治療後の予後に目を向けられるようになったことや、近年、集中治療室で発生する身体機能低下であるICU acquired weakness (ICU-AW)などの病態解明が進んだこと、加えて早期社会復帰を目指す世の中の変化が浮き彫りにしてきた問題であると考えられる。このような中で多職種チームによる、病態に応じた継続的な早期離床・リハビリテーションの重要性が多くの場面で指摘されている。

平成30年度の診療報酬改定において、集中治療室における多職種による早期離床・リハビリテーションに対して「早期離床・リハビリテーション加算（500点／患者・日、14日上限）」が新設された。当院においても、昨年度より早期離床・リハビリテーションチームを設置し、早期離床、リハビリテーションを実施してきた。今回、その取り組みについて紹介する。

3. 新しい吸着型血液浄化器レオカーナを使用して

臨床工学科 澤井 舜仁, 久米 悠介
 腎臓内科 石本 尚美, 小野 真也
 大澤 紀之
 循環器内科 今井 雄太

【はじめに】

LDL吸着療法は閉塞性動脈硬化症（ASO）に対して非常に有用な治療の1つであり、これまでのLDL吸着療法は高脂血症の有無で治療適用にならない場合があった。だが今回のレオカーナについてはフォンテイン分類IV度のASO患者であれば高脂血症以外の患者でも適用されるようになった。

【症例・方法】

ブルートゥ症候群の90代女性。直接血液灌流法で2時間LDL吸着を行う。治療前、終了まで適宜、皮膚灌流圧（SPP）を測定。下肢の状態を写真で記録した。

【結果】

期待していたほどの改善は見られなかった。やや血色は良くなっているが、治療により血管が拡張している徴候はあったが、9回目の治療の後に第2・5趾の切断に至ってしまった。

【結語】

切断に至ってしまったが、治験の際にもこういった症例は報告されているため本症例だけで判断するのは困難であり今後の参考にしていく。

4. 退院時薬剤管理指導料の算定に対する取り組み

薬剤部 小林 辰馬

【背景】

退院時に薬剤指導を行い、退院後の薬物治療の注意点などを文書作成することで、退院時薬剤管理指導料を算定できる。しかし、他の業務が手一杯であることから算定がほとんどできていなかつた。本算定業務は退院後の薬物治療を継続するために必要であり、算定に向け業務改善を行った。

部署内で退院時の薬剤情報提供の必要性を再認識し、文書作成に活用できるテンプレートを作成した。

【目的】

取り組みを開始してから1年が経過したため、業務改善効果の確認と見出された課題について検討する。

【方法】

取り組み前後で算定件数を比較し、入退院患者数、病棟毎の算定件数を分析した。

【結果】

改善前の3ヵ月平均は3件／全病棟であったが、改善後は82件と増加した。

【考察】

テンプレートの導入により文書作成の時間は短縮され、算定件数の増加につながったが、テンプレートが活用しやすい診療科や入院患者数に影響を受けることが分かった。新規テンプレートの作成やさらなる業務の効率化や標準化を行い、介入増加へと繋げられると考える。

5. エコーで診断したバルサルバ洞破裂の一例

臨床検査科 栗本 明典, 南 多加恵
 山本 祐己, 金沢 涼加
 奥野 早貴, 三浦 和
 古谷 善澄, 西村 康司
 畑 久勝

【症例】

50歳代 男性

【主訴】

両下腿浮腫

【来院時現症】

複数年家に引きこもって生活をしていた。3週間前より両下腿に腫脹がみられたが、放置していた。疼痛の改善なく歩行困難となつたため救急要請となった。

【臨床経過】

胸骨右縁第二肋間を中心として広範囲に心雜音が聴取され、来院時の心エコー図において、三尖

弁の逆流が指摘された。翌日に超音波検査室にて精査が実施され、三尖弁付近に可動性の疣腫を認め、同部位にバルサルバ洞より右房内へ欠損孔5.2mmの穿孔所見を認めた。直ちに主治医へ緊急報告を行い、その後心臓血管外科へのコンサルトが行われ、当日中に他院にて緊急手術が行われた。

【まとめ】

エコー図検査においてしばしば緊急での対応が必要な症例に出会うことがある。今症例においても緊急報告が必要であるとの判断により、主治医へ早急に連絡ができ、早期の治療に寄与できたと考える。

6. 看護補助者夜勤導入による看護業務の負担軽減への取り組み

看護部 旭 理恵,	宮崎 綾子
寺田 理恵,	木下 香子
大角 洋子,	猪飼 俊行
中川加奈子,	内本理恵子
竹中 建一,	河津 和樹
高牟禮あかね,	木村 里美
松並 瞳美	

【目的】

当院の夜勤帯の看護業務は急変や転倒転落の対応に加え、COVID-19患者を受け入れるための配置転換によって過酷を極めた。看護部長が看護補助者の夜勤導入を決定し、私達看護係長は夜間の看護業務の負担軽減に加え、看護補助者にとってもやりがいがもてるタスクシフトに取り組んだ。

【取り組みの実際】

看護師への質問紙からタスクシフトが可能な看護業務を洗い出し、基準手順を作成後、補助者に移行させ看護師の業務負担を調査した。看護補助者にはやりがいについての調査を行った。

【結果】

看護師の9割以上が夜間の業務負担が軽減したと回答した。タスクシフトできた業務は18項目で、その結果転倒転落件数は前年度より34件減少した。看護補助者の8割以上が患者に関わる仕事

にやりがいを感じていたが、チームの一員であるという実感は3割程度に留まった。経営的には急性期補助体制夜間配置加算を取得し収益増加に貢献できた。

【結語】

看護補助者の夜勤導入は、夜間の看護業務の負担軽減に繋がった。看護補助者がやりがいをもって業務に就くためには、看護チームの一員として巻き込んでいくことが今後の課題である。

7. 里親への育児教育入院を実施した一事例

看護部 久保 明美, 香川 留美
小児科 伊藤 英介
社会福祉事業課 山本 育代

【目的】

市中病院の産婦人科小児科病棟で里親への育児教育で入院を実施した事例報告。

【実践内容】

里親決定後、育児指導目的で10日間母児同室を開始した。里親をあえて「お母さん・お父さん」で呼び育児経験のない里親のベースや要望を確認しながら育児指導を行った。児と過ごす中で里親が育児にも慣れ、児へ声かけも自然にされる姿も見られる様になった。

【結果・考察】

未熟児室から退院する児の家族に退院後の地域連携を含めた看護が活用できた。また、里親と児の初回面会から母児同室まで連続して行った事は里親の愛着形成にも有効であったと考える。

今回、養育里親の里親研修と登録の流れの中で「子どもとの引き合わせ・受け入れ準備」に関わり里親の希望する看護提供をすることができ、国が進める「家庭養育優先の原則」にも貢献できる取り組みであると考えられた。

8. COVID-19病床における看護実践と チーム編成の振り返り ～立ち上げから第5波まで～

看護部 早川 大裕, 猪飼 俊行
今岡 誠, 今村 里紗
南 千鶴, 山中 寿規

2020年3月に救急病棟で新型コロナウイルス感染症（以下COVID-19）を受け入れることが決定し、2020年4月22日に救急病棟で初めてCOVID-19患者を受け入れた。第1～2波で病棟環境の整備、物品準備、個人用防護具の着脱手技の統一、担当スタッフの調整などを行ったが、第3波で陽性患者の急増により満床となり他病棟からスタッフが増員された。そこで新たに救急病棟内でCOVID-19チームが編成された。慣れない環境や感染の恐怖や不安もある中、早期にチームとして機能させるために①COVID-19について必要な基礎知識を持ち、適切なアセスメントにより状態悪化を防ぐ②正しい感染防止対策によりスタッフの二次感染を防ぐ③患者の思いに寄り添った質の高い看護を提供するという3つの目標を掲げ、チーム構築へつなげた。第4波ではECMO症例もあり多職種連携も強化され、業務整理やICUへのOJTプログラムを開始した。第5波はさらに若年層の患者が増加し、救命しなければならないという重圧も強く、スタッフの精神的疲労もより顕著に現れた。しかし自律したスタッフたちがチームとして支え合うことで乗り切ることができた。

9. COVID-19後に生じた反回神経麻痺の1例

耳鼻咽喉科 宗川 亮人, 酒井恵里香
只木 信尚

報告により様々だが声帯麻痺の原因として特発性のものが12%から40%存在すると報告されており特発性の中にウイルス性のものがかなり存在すると指摘されている。

COVID-19後の声帯麻痺として気管挿管により

反回神経が圧迫されて生じる挿管性麻痺は多数報告されているが挿管歴がなくCOVID-19の回復期に声帯麻痺を発症したものは本邦では報告がなく非常にまれである。本症例では気管挿管歴はなく、肺炎の縦隔浸潤や腫瘍性病変、動脈瘤なども認めず、声帯麻痺の原因としてSARS-CoV-2との関連性が示唆された。治療としては声帯内注入術が考えられるが、SARS-CoV-2関連の嗅覚障害や一般的なウイルス感染後の反回神経麻痺のように自然軽快する可能性もあると考えられ、本症例では経過観察としている。

10. 特発性腎出血と診断した小児例

臨床研修医	垣内 泰生
小児科	江角 祐香, 梅原 弘
	太田 宗樹, 中島 亮
	伊藤 英介
泌尿器科	梶野真由果, 西田 将成
	瀧本 啓太, 鴨井 和実
	三木 恒治

【緒 言】

血尿の鑑別疾患は多岐にわたるが、小児では膀胱炎など尿路感染症や急性腎炎症候群が多く、原因不明の肉眼的血尿に用いられる症候名である特発性腎出血と診断する機会は少ない。今回我々は診断した症例を経験したので報告する。

【症 例】

11歳女児

【現病歴】

X+1日に肉眼的血尿、X日に腹痛と嘔吐を認め、近医を受診し紹介となった。

【現症・検査所見】

体温36.9°C、心拍数86回/分、血圧109/76mmHg、腹部に圧痛や腫瘍を認めず、右肋骨脊柱角叩打痛が陽性であった。尿中赤血球数は150個/HPF以上で形態は均一、尿細胞診はclass IIであった。血清クレアチニンは0.73mg/dl(97.5%tile: 0.58mg/dl)、血清補体値は正常、自己抗体検査は陰性であった。腹部超音波検査で腎動脈血流の欠損や減少を認め

なかった。腹部単純CT検査で尿路に高吸収域を認めず、右腎の軽度腫大と低吸収を認めた。

【経過】

臨床経過から膀胱炎や腎孟腎炎、急性腎炎症候群、IgA血管炎、腎梗塞、尿路結石症、尿路悪性腫瘍を否定し、X+3日も肉眼的血尿が持続するため泌尿器科に対診した。膀胱鏡検査で右尿管口からのみ血尿の噴出があることを確認し、右特発性腎出血と診断した。血清クレアチニン上昇は腎出血による腎性腎機能障害と判断した。安静と輸液、鎮痛剤、止血剤の保存的治療のみで腹痛と肉眼的血尿はX+4日に、顕微鏡的血尿はX+5日に消失した。X+6日に退院した。

【考察】

本症例は片側尿管からの血尿の噴出が診断の決め手となったが、特発性腎出血の診断には他の疾患の除外が重要である。

11. 特発性脊髄硬膜外血腫に対する当院での治療成績の検討

整形外科 西 亮祐

特発性硬膜外血腫(SSEH)は、突然の強い頸部痛や背部痛を伴い、進行性に麻痺が生じる疾患で、診断、治療が遅れると麻痺が残存することがある。2010年から2021年にSSEHと診断された14症例について、Franckel分類、症状、高位、血腫の範囲、治療経過および結果を検討した。平均年齢は70.5歳、男性7例、女性7例であった。全例頸部痛もしくは背部痛を認めた。進行性の神経症状を来たした4例全てに24時間以内に手術を行った。術後、3例がFrankel E、1例がFrankel Dまで改善した。保存的に経過を診ることができた10例はいずれもFrankel Eまで改善した。

SSEHの予後に関係する因子として、神経症状の程度、手術までの時間、年齢、血腫の範囲が報告されているが、発症時不全麻痺、早期手術、若年発症、4椎体以内の血腫であれば予後良好とされている。

当院でも早期診断、早期治療により良好な経過

が得られた。神経症状が軽度であっても強い頸部痛や背部痛があればSSEHを鑑別に挙げる必要があり、本疾患と診断されれば、早期に手術療法を施行することも有効な選択肢の1つであると考えた。

12. ウイルス性髄膜炎と診断し入院後に抗NMDA受容体脳炎と判明した1例

臨床研修医 加藤 悠太

脳神経内科 深沢 良輔、西村 優佑
武澤 秀理、藤井 明弘

【はじめに】

自己免疫性脳症である抗NMDA受容体脳炎の初発症状は、統合失調症様の精神症状が特徴的で、精神科疾患と誤診されるケースも多々ある。今回は入院後の症状から速やかに診断まで至り治療を行った一例を報告する。

【症例】

23歳女性、発熱と間欠的な頭痛にて受診し、ウイルス性髄膜炎として入院。入院後に異常行動や不随意運動が出現し、抗NMDA受容体脳炎を疑った。CTにて卵巣奇形腫を発見し、翌日に腫瘍摘出。その後血漿交換、免疫療法予定となったが、同日に痙攣重積を生じICU管理となった。入院中に種々の免疫療法（血漿交換、大量 γ グロブリン療法、ステロイドパルス療法など）施行し、入院後約5か月で意識の改善を認めた。

【結語】

ウイルス性髄膜炎と判断した症例でも、入院後急速に意識が悪化するケースがある。また、若年女性で精神症状や不随意運動を伴う脳炎では、本疾患を疑い、速やかに奇形腫の検索・摘出、免疫学的治療を行う必要がある。

13. 孤立性上腸間膜動脈解離と腹腔動脈解離

臨床研修医 横谷 優作
循環器内科 牧野 真大

【症 例】

症例①：

46歳男性。急性発症の冷汗を伴う心窓部痛で当院救急外来を受診。CT検査で腹腔動脈起始部に偽腔閉塞型の解離を認め、同日から血圧・脈拍管理、鎮痛による保存加療を開始。経過は良好であり自宅退院。

症例②：

65歳女性。急性発症の嘔吐、下痢を伴う上腹部痛を主訴に来院。CT検査にて、上腸間膜動脈に偽腔開存型の解離を認め同日から入院加療を開始した。症例①の治療に加え抗血栓療法を併用。経過中に腹痛を認めたため再度CTを撮像したところ、脾動脈、総肝動脈に偽腔閉塞型の解離腔の進展を認めたが、その後は腹部症状を認めることなく良好な経過を認め自宅退院。

【考 察】

メタアナリシスによる解析を行った研究より今回の症例を考察する。報告と同様にSISMADにて解離腔の伸展を認めた。明確なコンセンサスの得られた治療は無いものの、大動脈解離と同様に血圧・脈拍管理が急性期、慢性期においても重要なと考えられる。

【結 語】

今後さらなる症例研究の蓄積により、エビデンスのある治療・診療が開発されることが望ましい。

14. 感染性顔面動脈仮性動脈瘤破裂により気道緊急をきたした一例

臨床研修医 古田 謙
救急集中治療科 岡 翔、越後 整
任 純理、種子島夕佳
瀬越 由佳、松本 悠吾
放射線科 勝盛 哲也、山端 康之

【はじめに】

外科的気道確保とは、緊急に気道確保の必要があるが、気管挿管も困難な場合に行う観血的手技である。今回、頸部皮下出血による声門の圧排により、気管挿管困難となり、気管切開を行った一例を報告する。

【症 例】

患者は来院当日、右頸下部腫脹を主訴に救急受診した。CTにて右顔面動脈からのextravasationを認めたが、帰室後に努力様呼吸が出現。気道緊急と判断し介入し、気管挿管を試みたが、血腫による声門の圧排を認め挿管困難と判断。気管切開を実施した後、IVRを行いICUに入室した。第2病日に鎮静解除し、人工呼吸器を離脱した。第3病日にICU退室し、第6病日から経口摂取開始した。その後、適宜CTや喉頭展開にて声門部を評価し、合併症なく第60病日に退院した。

【考 察】

気道開通は患者の状態を把握する際に、真っ先に確認すべき所見である。今回の症例では迅速に気道緊急を判断し介入したことで、良好な結果が得られたと考えられる。

15. 慢性期に繰り返し症状を呈した茎状突起過長症による内頸動脈解離の一例

臨床研修医 山崎 貴士
脳神経外科 岡 英輝、横矢 重臣

【はじめに】

脳塞栓症において、特発性内頸動脈解離が原因とされていた中に、実際は茎状突起過長症が原因であった症例がある。茎状突起過長症に伴う内頸動脈解離は保存的加療による経過良好例が数多く報告されている。しかし、その長期予後を調査した研究は少ない。今回、数年にわたり症状を繰り返した茎状突起過長症に伴う頸部内頸動脈解離の一例を経験した。

【症 例】

59歳男性、左一過性黒内障発作を生じ来院した。画像検査で左内頸動脈の描出低下が指摘されたが

精査なく経過観察となっていた。2年後、再度一過性黒内障が出現したが、頸動脈エコー検査で内頸動脈狭窄は指摘されず、一時的な抗血栓薬で経過観察となった。その後、再び一過性黒内症が出現した。各種検査の結果、茎状突起過長症による左内頸動脈解離と診断し、左茎状突起切除術とステント留置術を施行した。術後は症状の再発なく経過している。

【考 察】

茎状突起過長症に伴う内頸動脈狭窄症は長期間経過しても再発しうる。特発性内頸動脈解離と茎状突起過長症に伴う内頸動脈解離を鑑別する必要があり、長期間の再発リスクを考慮すると、後者には茎状突起切除術を含む手術加療の妥当性がある。

16. 特徴的な頸椎MRI画像所見を呈したovershunting-associated myelopathyの1例

臨床研修医 河野 仁

症例は77歳女性、歩行困難を主訴に来院。58歳時にくも膜下出血のため、脳動脈瘤クリッピング術、V-P shunt術を施行。以降、軽度の右上下肢麻痺、失語が後遺症としてみられたが、独歩でADLは自立していた。来院半年前より歩行時のふらつきがあり、転倒を繰り返すようになった。その後歩行器なしでの歩行が困難となり、精査目的に入院した。診察所見では両下肢痙攣性、深部覚失調、立位保持困難がみられた。頭部MRIでは硬膜肥厚、頸椎MRIで延髄からC1/2高位にかけて静脈叢が拡張し、上下左右対称性に脊髓を圧迫していた。またCTAでも硬膜外静脈叢の拡張がみられ、V-P shunt術後であることから、overshunting-associated myelopathyと診断した。シャント結紮術を行い、術後翌日より自立歩行可能となった。2週後のCTAで硬膜外静脈叢の拡張の改善、2ヶ月後の頸椎MRIで脊髓の圧迫の改善が得られた。特徴的な画像所見を呈した症例であり、文献的考察を交えて報告する。

17. 急性腹症・ショックバイタルで救急搬送され子宮内外同時妊娠で卵管峡部妊娠破裂をみとめた一例

臨床研修医 山岨 真希

【症 例】

28歳女性、主訴：下腹部痛

【現病歴】

来院日15時頃勤務中に腹痛自覚。救急隊接触時末梢冷感あり収縮期血圧で90mmHg程度の血圧低下認め、当院救急センター搬送となった。来院1週間前に近医で子宮内妊娠の確認あり、妊娠に際して、タイミング療法に加えクロミフェン療法されていた。経腹エコーではダグラス窩液体貯留をみとめ、腹腔内出血が疑われた。造影CT検査で、子宮近傍からのextra vasationを認めた。センター内で開腹行い、卵管峡部妊娠破裂を認め、止血された。その後新たな貧血の進行なく、子宮内妊娠については正期産に至った。

【考 察】

異所性妊娠についてはその95%が卵管妊娠とされる。排卵誘発でクロミフェンを使用した場合、子宮内外同時妊娠が3000例に1例程度の割合で起こる可能性があるとされ、2004年から2013年までの10年で日本国内の子宮内外同時妊娠症例のうち、不妊治療後の症例は73.9%であった。

18. 独歩で退院となった心肺停止の一例

臨床研修医 佐藤 健太
循環器内科 内橋 基樹

【症 例】

49歳男性

【現病歴】

X日7時20分に起床時より胸痛が出現し、救急要請された。7時29分救急隊現着した際、心肺停止状態（初期波形VF）であった。Bystander CPRなし。

【現症・検査所見】

心肺停止状態

CAG所見：#1 50%， #6 100%， #11 75%，
#HL 75%

【経過】

当院到着時も心肺停止状態であり、直ちに血管造影室へ入室し、VA-ECMOを導入した。導入後の電気ショックで自己心拍が再開した。#6で完全閉塞を認めたため、AMIが原因と判断し、PCIが施行された。IABPも留置され、ICU入室となった。第2病日にVA-ECMO離脱、第4病日にIABP抜去、第6病日に抜管、第7病日、ICUを退室、第23病日、独歩で退院となった。

【考察】

心肺停止状態でBystander CPRがない場合でも、当症例のように早期のVA-ECMO導入を含めた集学的治療によって、独歩での退院が可能であることを再確認できた。救命においては、救急隊・研修医・救急医・循環器内科医がチームとなって連携することが重要である。

19. アルコール性肝硬変に特発性細菌性腹膜炎を合併した一例

臨床研修医 岩本 在央

【症例】

68歳男性。

【主訴】

腹痛。

【現病歴】

12年前に脂肪肝を指摘され、アルコール性肝硬変と診断されていた。以後も何度も吐血で救急外来を受診していた。しだいに胸／腹水貯留が著明になり、胸腹腔穿刺を繰り返していた。20XX年Y月Z日、一般外来で腹腔穿刺を施行後帰宅し、夕方に発熱と腹痛が出現し症状が持続するため同日夜間に救急外来を受診、特発性細菌性腹膜炎(以下SBP)を疑われ同日入院加療を開始した。

【臨床経過】

CRPが高値を示したが、白血球は9500と軽度增多、その他は前回の検査値から著変なかった。また胸腹部画像検査では、中等～多量の胸腹水の

貯留をみとめた。アルコール性肝硬変に合併したSBPと判断し直ちに抗菌薬投与(CTRX2g/日)を開始した。入院2日目以降、発熱や腹痛などの症状の増悪をみとめなかつた。腹水／血液培養はいずれも陰性だった。血液検査で炎症反応のpeak outを入院7日目に確認した。腹腔穿刺は入院5日目と8日目に、計2回行った。入院9日目、CTRX投与終了と同時に退院した。

【考察】

本症例に対して行われた治療について、各種文献を用いてその妥当性を検討した。SBPを疑った時点で直ちにCTRXの投与を開始したことは妥当であったと考えられるが、抗菌薬の選択や他の治療法、SBPの予防などに関して一考の余地を垣間見た。

【結語】

アルコール性肝硬変に特発性細菌性腹膜炎を合併した一例を経験した。

20. ニューモシスチス肺炎と臨床診断し播種性クリプトコックス症も合併した後天性免疫不全症候群の1例

臨床研修医 大江 崇史
呼吸器内科 菅 佳史、長谷川 功
橋倉 博樹
血液内科 北村 憲一

【症例】

45歳、男性

【主訴】

倦怠感、食欲不振

【現病歴】

X年1月初旬に勤務中5分程度の意識消失があり、当院救急受診した。圧が90台であったが、心電図、頭部CT、動脈血液ガス分析では、異常は認めず、神経調節性失神の診断で帰宅した。その後から倦怠感、食欲不振があり、11日後に当院総合内科を受診、血液検査上白血球減少、貧血を認め、血液内科や消化器内科を紹介受診。骨髄検査や胃カメラが行われたが、異常は認めなかつた。

その後、労作時呼吸困難もあり、救急受診より22日後に総合内科を再受診し、SpO₂92%と低く、肺血栓塞栓症を疑われ、造影CTを施行し、両肺上葉に囊胞を伴う浸潤影を認め当科を紹介受診した。CT画像よりニューモシスチス肺炎を疑い、 β Dグルカンが高値で、HIV抗原抗体検査が陽性であり、後天性免疫不全症候群（AIDS）に合併した。ニューモシスチス肺炎と臨床診断した。クリプトコッカス抗原も陽性で、血液培養からもクリプトコッカスネオフォルマンスを認め、播種性クリプトコッカス症と診断し、スルファメトキサゾール／トリメトプリム合剤リポーソーマルアムホテシリンBにて治療を行った。

【考 察】

日本でのAIDS指標疾患の発症頻度はニューモシスチス肺炎が多く、サイトメガロウイルス感染症、カンジダ症、活動性結核と続く。複数の日和見感染を合併している場合もあり、注意が必要と考えられた。